

私の青春

新潟県 若月 太郎兵衛

大正九年二月二十五日、小戸（九十戸）の貧乏小作農の長男として生まれ、親たちの苦勞を見ながら育った。小学校は四キロの道のりを通った。高等科は一・五キロ、とても楽だった。次は川東国民学校へ八キロ、二カ年一人を通った。冬は雪との戦いであった。片道二時間かかった。小川泰山のことを思い浮かべたり、演説の真似ごとをやりながら通った。無事卒業、青年学校へ。

昭和十五年徴兵検査、甲種合格。十六年二月八日結婚。十八日、現役兵としてソ満国境二二九部隊へと出発。二十日、神戸集合。神戸港出発。北朝鮮羅津上陸。鉄道で綏芬河二二九部隊へ同年三月一日入隊。以来四年半、軍隊生活。国境守備監視隊付下士官勤務。炊事班責任者。憲兵隊へ派遣される。鶏寧・東安憲兵

隊本部付。戦況悪化して新編師団統出。教育要員として北安二六九連隊へ転属、兵の教育訓練に当たる。陸軍伍長でしかないのに、開拓者のおっさんなど満州者が一斉動員で入ってきたので、将校不足、見習士官不足の折、仕方なく将校業務担当を命ぜられ、粉骨碎身、お国のためと任務に精励。五月三十日、一二三師団司令部高級副官の指名で司令部へ派遣さる。司令部での任務は文書の受発送係。八月一日、軍曹に任ぜらる。

二十年八月九日午前零時、ソ連軍はソ満国境全線にわたって猛攻を開始。二十四時間以内に陣地へ移動、戦闘体制に入った。既に制空権は敵に握られて、彼等の独壇場であった。兵器も精鋭も転出のあと、沖繩の二の舞を覚悟しなければならなかった。多くの戦友は戦車特攻隊として華々しく散っていった。戦車の腹の下へと爆雷を抱いて突っ込んでいった。敵戦車を何十両も爆破炎上させた。戦友は各関節からばらばらになってふっとんだ。軍馬も銃撃にやられ、戦野の至るところに倒れておった。夏の炎天にあぶられて腹はゴ

ム風船のように膨れ上がり、今にもパンク寸前といったところ。パンクした死臭は血生臭き戦場に漂っておった。特攻隊の多くは満州開拓者のお父さんたちだった。軍に入って幾日もたっていない。名前もわかっていない。全滅すれば誰も証明する者のいない、まさに無名の戦士である。何人ほどいたのかはいまだに不明である。毎年孤児たちが母国に憧れ帰ってくる。残念ながら五十年の歳月は冷たく、断腸の思いである。戦争の残酷さ、空しさ、なぜに戦争はこのように……。

八月十五日敗戦、十七日武装解除。僕は師団長はじめ幕僚の拳銃、刀を、敵に指定された場所へ集積するよう任命された。敵に取られる物なのだ、使い物にならぬようにと拳銃、小銃、機関銃、すべて遊底を分解して藪の中へ捨てた。敵は怖がって誰も来ていない。少しばかり鬱憤を晴らした感じ。

翌日、我々は陣地から北孫呉の街へ下りることになった。丸腰で敗残の兵たちはとぼとぼと下山してきた。中国人は胸を張って反り返り、腕に赤腕章をつ

け、棒の先には赤旗を靡かせながらせせら笑っている。昨日まで「大人、大人」と崇めておきながら、今日はロシアの手先になって大威張り。街は敵の来るまでに火をつけて焼き討ち戦法で焼いてしまったのだ。

それでも師団長の官邸は焼かなかったので、我々はひとまず官邸に住むことになった。捕虜の身分なれど食料は十分にあった。牛を殺して食べた同じ師団でも、隷下部隊の国境守備隊は苦戦した。言語を絶する死闘で、全滅した隊も多かった。また戦車特攻隊（挺身大隊）は全滅に等しいものであった。官邸に入った司令部要員はもったいない立場であった。北澤貞次郎中將（一・三師団長）は召集軍人で高齢であった。風呂へ入るときの裸姿はみすばらしく瘦せ衰えて、敗戦の惨めさを象徴しているような哀れな姿であった。今も目に焼き付いておる。師団長は祖国の土を踏むことなく、シベリアの凍土に眠ることになった。ご冥福を祈るのみ。

我々は九月初め、作業大隊（一千人単位）に編成され、徒歩で入ソすることになった。北孫呉、だけで二万

六千人、二十六大隊になる。途中、野宿。毛布を被り大幕露営。冷たい星空を仰ぎ敗戦の無念さ、惨めさが身にしみた一夜であった。朝露でびしょびしょ、情けない運命に泣いた。それでも、ロシア人が侵略してきたのだから、すぐ帰してくれると信じておった。ウラジオから帰れると思ってはみたものの、肝心の祖国は焦土となり、占領軍はいる、船だってあろう筈がない、だんだん心配になってきた。名にし負う黒龍江は、戦車が渡った船橋がかかっておった。こちら黒河、対岸はブラゴエシチェンスクだ。滔々とアムールは何も知らぬげに流れている。水上警察のプロペラ式艇は唸りを上げて飛ぶように走り回っておる。デモンストレーションである。我々を運ぶ船は原始的な水車式のスローモーなものである。

黒河の港は略奪物資で山積みになっている。到着間もなく積み荷の使役だ。「ダワイ、ダワイ（早くやれやれ、働け）」とせき立てられ、腹が立つやら情けないやら、仕方なしに動かざるを得なかった。どうせ積むならと糧秣など、鼠に食われた軽い物を選んで積ん

でやった。それがやがて我々の大事なシベリアでの食糧になろうとは露知らず、大失敗となる訳である。

やがて乗船、ブラゴエ上陸。驚いた。破れ家屋、屋根は穴だらけ、道路は凹凸、水溜まり、よくもこんなに貧乏になったものだ、それでもヒトラーに勝ったのだから、社会主義の人民の底力は大きなものと感心したり……。少しばかり列車に乗せられ、すぐ下車を命ぜられた。ウラジオへ直行だと思いきや下車、仕方なくぶつぶつ言いながら降りた。ダワイ、ダワイとせき立てられて入った所は、とてつもない大きな馬小屋のような建物、中には麦藁がふんだんに敷かれておる。がさがさ、これでは馬だ、おしっこしても大丈夫、馬並みだ。がさがさ、皆ははしゃいでいる。やがて夕食。黒パン三百グラムと塩水に馬鈴薯二切れ三切れ、こんな食糧で働けと言うのか。とは言っても捕虜の身、諦めざるを得なかった。がさがさ麦藁の暖かさのみが慰めであった。旅の疲れもあってぐっすりと眠ることができた。

「起床、起床」の声に起こされた。まだ薄暗い九月

五日、明けの明星が輝いておる。外は零下、霜で真っ白だ、ちんかんに凍っている。仕事は馬鈴薯掘りとのこと。眠い目を擦りながら例の食事を済ませて舎外整列、点呼。「アジン、ドヴァ、テリー、チテリー（1、2、3、4）」、勘定が合わぬ。これがやがて在ソ期間四年半、じれったさに泣かされることになる。馬鈴薯（カルトシカ）畑は広く、高原の如く地平線まで続いている。女性監督ホーチャは足の速いこと、ついて行くのに大変だ。彼女曰く、スターリンは一秒を無駄にするな、一カペーク（ソ連のお金の単位、日本の一円のようなもの）を疎かにすること。まさに小走りで計測（二十メートルおきに正方形に印をつけてゆく、碁盤の目のように）、そこへ馬鈴薯を集積するのだ。

いよいよ芋掘りだ。一人二畝受け持ち、カルトシカ掘りだ。前方は霞んでいるほど遙か彼方、夕方までに届くだろうか、気の遠くなるようなソフホーズの畑、社会主義国の大きさに驚いた。

朝のうちは土が凍っているので（九月初めなのに）

参った。二十センチくらいの棒切れ一本預けられ、初めての労働。掘った、掘った。シベリアは北海道と同じく無病なので成長拔群、トマトの木のように大きく、芋も大きく豊作なのだ。北海道や満州並みの酷寒地であり、湿度が少なく適地なのだ。おまけに一二年作り、後は五年間も休耕して草ぼうぼう。六年目になると大型トラクターで鋤き起こし、ブラウで碎上して黒パン用のライ麦を作る。休耕、輪作、無肥料粗放農業、機械化農業の典型だ。畑は耕うん前、一面の草原に火を放ち焼き畑にしてやるので理想的と思った。土地は広く幾らでもあるのでとのこと、羨ましい限りであった。

朝のうちは畑が凍っているので、棒で掘っての苦勞が忘れられない。十時頃より氷も溶けて掘りやすくなった。あまり芋が沢山出てくるので困った。夕方まで掘っても彼方の終点へは届きそうもない。誰か頭の良い奴が名案を発明した。芋の茎の根元を両足で踏みつけて茎だけ抜き取り、後は四、五個くらい指で探りながら掘り取ることだ。柳箆にいったいになれば、か

ねて計測しておいた集積地点へあけてくる、これであればノルマも何とか達成できそうだ。掘っているうちに、ろくな物も食べていないのでお腹が焼き芋を要求している。焼くといっても燃えるような物は何もない。仕方なく枯れ草や芋の茎などを燃やしてやってみた。焼き芋などできる訳がない。生焼き芋をかじり始めた。生まれて初めての食べ物、お腹の虫も驚いた。でも、こうした苛酷な環境では結構栄養になるらしく、誰も腹痛もなく満足であった。朝、明けの明星を仰ぎながら作業へ。作業が終われば次のお月様が赤くぼんやりと出ておるのであった。

こうしたことを三日くらい続けたけれど、人海戦術の限界を知った。監督は掘り取り専門のトラクターを持ってきた。トラクターは二畝一度に鋤き起こし、振動で土をふるい落としながら芋が表面にばらばらと撒き散らしたように落ちて行く。我々はその芋を拾い集め簞に入れ、いっばいになれば集積地点へあけてくる。簡単のようだけれど忙しいこと夥しい。さすがは社会主義国だ、スケールが違う。こんな大きな機械化

農業は初めて見た。彼等は自慢しながら「日本にはないだろう」と得意になっておる。悔しいけれどまさにその通り、牛馬の農業は北海道にはあったかも知れぬ。全部掘り終わって今度は駅まで運搬だ。USAベーカー・トラックが畑へ、所かまわず入ってきた。全然スリップしない、凄いいトラックだ。余談になるけれど、アメリカがヒトラーをやつつけるためにロシアに援助した物なのだ。そればかりではない。メリケン粉、缶詰、鯨肉、フィラデルフィアのフランクリン工場製蒸気機関車、ジープ、などなど。日本と戦いながら、さすがは物量誇るアメリカなんだ、日本の敵ではない。桁が違うと思った。

二十メートルおきの芋の山は、スコップで麻袋に詰めて二人でトラックの上へ投げる。あけては詰めるの繰り返し。満タンになれば駅へ。有蓋貨車へスコップで積み込む。芋は澱粉工場用や食料になるとか。一週間ぐらいでやれやれ芋掘りも終わった。今度こそはダモイ（帰国）だとはしゃいだ。監督が、畑を検査したら手掘り畑は五〇パーセント残っていると怒り、どう

なることかと心配したけれど、隊長が謝ってくれ、何とか許してもらい、ほっとした。

我々は有蓋貨車の二段式の中へ乗せられた。スコラ、ダモイ（もう直ぐ帰れる）だ。皆は嬉しそうにはしゃいでいる。列車はブラゴエを後にして発車した。カンボーイ（監視兵）がにわかにマンドリン（自動小銃、連統七十発発射できるもの）の威嚇射撃が始まった。車内は一瞬しーんとした。はて騙されたか、帰還ではない、シベリア送りだぞ、腕時計の羅針盤は進行方向「北」を指している。皆はがつくりした。スターリンの奴、侵略しておきながら、なんてことだ。情報が入ってきた。大分長い間風呂（バーニヤ）に入っていないので、風呂のある街まで行くのだそうだ。風呂に入って心身を清め「ダモイ」させてくれる、朗報であった。我々は何度も騙された、信用できぬと半信半疑であった。三十センチくらいの小窓から覗いて見ると、外は広漠たる草原、人家もなく、人影もない、殺風景な景色である。大分行くと、やがて田舎街のような所へ着いた。ここで皆下車し、入浴である。日本と

違い、大きな桶に湯を一杯貰って、体を擦りながら洗う、洗い終わるとサウナで暖まる。サウナの部屋は二段になっており、皆は五百羅漢のように行儀よく並ぶ。中でペーチカが真っ赤に燃えている。勇気あるつわものがペーチカの焚き口を開け、柄杓に水一杯一気に火を目掛けてぶっかけるのである。ぐわーと音を立てながら部屋の上部目掛けて湯気がたち爆発的に熱い。皆は石鹼だらけのするする体。ドジョウのように段の上からまくれ落ちるのであった。おー熱い、驚いた、火傷したとか、てんやわんやの大騒ぎ。いやはや凄いバーニヤ、サウナの一席であった。サウナからはシャワーで洗って終わりになるのである。

身も心も軽くなった感じ。列車が待っている。おー機関車が反対についておるぞ、これはヤバイぞ、ぶつぶつ言いながら貨車に乗った。走り出した。また威嚇射撃だ。ダダ、ダダー、音はこだましている。また騙されたか、いくら悔しくてもどうにもならぬ。逃げればたちどころに射殺される。諦めざるを得なかった。どんどん北の方へ。しばらく走って森林地帯に

入った。凄い落葉松林だ。所々に望楼のようなものが見えたりしてきた。囚人のいる流刑地だ。落葉松林のど真ん中に列車は静かに停車した。なんだ、こんな林の中にどうしたんだ。半分の五百人下車せよとのことである。名前などどうでもよい、員数だけあればよしとのこと、もう品物扱いか動物扱いであった。我々先頭車から五百人は下車した。

満州国地図で見れば、頭の一番とんがった所の対岸あたりで北緯五十五度、北樺太の北端の緯度である。無人駅でスタンチャ、バムと言っておった。ここから徒歩で一・五キロくらい歩いた。大きな煉瓦工場だ。一号〜十二号、ペーチカまである。年産百五十万枚の焼き煉瓦が生産される。ヒトラーとの祖国防衛戦争で手が回らず、廃屋のような荒れ方、酷いおんぼろ工場だ。我々の住まいは大きな木造の建物で二棟、炊事室と半分医務室である。

到着早々、各自は寝る所を作らねばならぬ。自分は屋根裏へ行くことになった。各自は、松のこわ板のような粗末なものを釘打ちしながら寝台作りである。松

のこわ板では毛布一枚敷いたぐらいで寝れるものではない。人間三分の一は寝るのだ。こんなことでは冬は越せぬ、僕はすかさず馬屋へ跳んだ。馬夫にタバコをやって麦蘖と毛布一枚を貰った。松板の上に麦蘖を広げ、その上へ毛布を敷いて端々を釘止めにした。完成。ごろりと寝てみた。申し分なし。柔らかい。自分はいそれで良いけれど、皆も何とかせねばと心配になり、君たちも早く麦蘖を貰ってこい、と。皆は各自毛布を持って馬屋へ跳んでいった。馬夫は「いけません、駄目です、馬が風邪ひく」。皆はしょぼしょぼうなだれて帰ってきた。若月はいつも要領がいいんだ、と羨ましがられた。僕は大隊長に、日曜日を利用して枯れ草集めをやり、寝台作りをやらせて下さいと進言した。隊長は、よい発想だ、よい着眼だと褒められた。すぐ実施して冬を越す自信を深めた次第。

バム収容所では初年度十四人の戦友を亡くしてしまった。しかしよそのラーゲルでは桁違いの犠牲者を出している。僕らのバムでは恵まれておった。有能な通訳が五人もおって、うまく彼らを操縦してきたから

だと思ふ。監督も立派な人たちであつた。ボルシェビキ党员（政治部員）も尊敬すべき人格者であつた。ラーゲルの所長バラケリフ上級中尉も立派な人であつた。工場長だけ、ノモンハンで片端にされた恨みがあるとか、怒鳴り散らしたり嫌な奴だつた。特に女性監督ホーチャは素晴らしいヒューマニストであつた。カンボーイもお人好しで、仲よしになつて理解できた。

煉瓦工場の復旧作業、ラーゲル周りの三重の鉄条網を作る作業。僕らはドイツの捕虜でも来るんだらうと思つておつたが、これもまんまと騙された。煉瓦の原料の粘土掘りはこの世の地獄だつた。シベリアのツンドラ地帯、夏でも地下二メートル以下は凍つていて溶けないのだ。まさに一枚岩。パールもツルハシも受けつけない。電柱くらいの大きな木で焚き火して掘るのだけれど、一日かかつて何升も掘れない。工場長は、まんまにもお粥にもならぬとつかして怒つてゐた。彼は、僕ら一人一日いくらと賃金をラーゲル側に支払わねばならぬのださうだ。

煉瓦窯に焚く燃料は落葉松であつた。その伐採が

また大変な仕事で、当時は質より量の時代。ピラー（鋸、一メートル長さの二人引き用）は二人して押したり引つ張つたりの代物で、切れ味は悪い。相手と気合が合わなければ仕事にならぬ。研ぐとしても、ろくにヤスリもなく品も悪い。日本兵の建設隊の物を誰かが持つておつたので助かつた。大木を二人で切り倒して、一メートルの長さに切断して、高さ一メートル、長さ六メートルが二人組のノルマだつた。お腹いっぱい銀飯でも食べておれば大した労働ではない。栄養失調ではどうにもならぬ。松の小枝にでも足が上からず倒れる状態、昼飯は前夜のうちに黒パンを支給分食べてしまつてゐるのだから、昼は空飯盒に雪を詰めて湯を沸かして飲むだけ。夜に我慢して取つておく盗まれてしまうから。黒パンは、朝時間がないので前夜の暇なときに分配することになつておつた。それも班内で皆の注視の中で当番が、やじろべえ秤（平均秤）、これもシベリアならではの発明品で頭数に切つて計る。余分が出るとそれを細かく切つて、秤に乗せながら平等に分ける。これはど平等公平なことはないだろ

う。貰ったパンを手作りの袋に入れ枕元に置いたものが、翌朝なくなっている。あき袋は廊下あたりに捨てられている。旅の恥はかき捨てとうそぶいておる。人間の浅ましき、情けなさ、人間の原点を見たものである。だから、夜貰うとお腹に入れてしまふ。翌日の昼はじっと我慢という訳だった。

最初の頃は電気もなく、松やにを取ってきて空き缶に入れ火をつけて、それを明かりに暮らした。結びの繕いは糸がなく、軍足をばらして、その糸で裁縫をやった。マッチもなくなったので工夫した。軍足をばらして糸の束を作る、空き缶を切って鉛筆大の筒を作り、小束の糸を入れセットして一端に火をつけて燃やし、ふっと吹き火が消えたら少し灰になった先端を筒の中へ引き込む。それから必要になったとき、少し炭の先端を押し出し、石英のような堅い石とやすりのような金属で、カチン、カチンと火花を出しながら点火するのである。案外簡単で、吹けば燃え上がり火が得られる。窮すれば通ずとはこのことか。生きる為の創造であった。煙草だけは駄目だった。お茶葉も白樺の

葉も新聞紙に巻いてのんだけれど、涙は出る、口の中はひりひり、咳は出る。大体ニコチンがないものは駄目だということだった。

その政治部員は、青い帽子を被っておるので青帽と言っておった。この地区ラーゲルも含めての一番の権力者である（ボルシェビキ党員）。我々の生活、作業全般の指導監督の責任者である。

昭和二十年九月入ソ以来、半年近く入浴はしていない。虱は湧いて皆垢だらけ。夜には南京虫に食われ、体は肋骨が湯たんぼ、洗濯板。まさに餓鬼道、寝ても起きても食い物の話、夢ばかり。この冬は越せるだろうか。弱い者は栄養失調で死んでゆく。絶望の果て、被服手入れ用具のナイフ（肥後守）で割腹自殺した少尉もおった。

当時ソ連ではヒトラーとの戦いで国の経済力の七〇パーセントも失っておった。自国の国民も欠食続き、悲惨な状況であった。我々の食料は、前にも書いたように満州から略奪してきた食料がそれに当てられて

おったようだ。たまにアメリカの援助物資、鯨の脂
肉、ポークソーセージなど、匂い程度であつたが支給
された。塩はシベリア産の山から掘つた岩塩である。

黒パン三百グラム、他に雑穀、小豆、大豆、高粱、粟
が支給され、米はなかつた。魚はたまに樺太産の日本
物。十三年前にとれた酸化した乾燥鰯（ドラワ、薪と
言つておつた）を煮たもの。野菜はキャベツ、馬鈴薯
ぐらひだつた。汁もので飯盒に三分の一くらい。目玉
汁と言われ（覗くと眼が映る）酷いものだつた。食料
が遂に底を突いた。糧秣倉庫の床板をはがして縁の下
の落ちこぼれを掻き集め調理してくれたが、土臭く微
臭くて口に入れられるものでない。

また、あるときは無精白の粟を炊いてくれた。ざら
ざらじゃきじゃきして食べづらかつた。さあ大変、翌
朝便秘が酷く、医務室は浣腸かけの患者で満員。朝工
場では仕事どころではない。皆お尻を出して、「うー
ん、うーん」のしかめ面、あつちにもこつちにも砲列
をしいて唸っている。殺される、苦しい、悲鳴を上げ
ている。青帽がやつてきた。「ボチム（何したのだ）」、

「無精白の粟を炊いて食べたのだ」と誰か報告した。
「馬鹿者めが、粟の皮には物凄くタンニンが含まれて
おるのだ、命とりだ」かんかんに怒つた。直ぐ炊事場
へ行つて精白工場へ持つて行けと言われた。我々は肛
門に棒きれを使つたりして砂のような糞をぼろぼろと
排除した。タンニンで腸粘膜が硬化してしまうとのこ
とであつた。

半年ぶりに隣部落（囚人が刑期終わつて上着した者
同士が住んでいる集落）にバーニヤがあると聞き、皆
は喜んだ。重い防寒外套を着て一・五キロくらい徒歩
で順番に行くことになった。五百人だから三日もか
かつた。番がきたので行つて見て驚いた。青帽が不眠
不休で薪割り、火炊して頑張つておられる。兵隊には
薪割りの仕方を取り怪我しないように教えておつ
た。湯加減を見たり孤軍奮闘の姿、日本軍隊では見ら
れない光景であつた。自己犠牲、奉仕の精神、素晴ら
しい感銘を受けた。衣服は入浴している間に高熱の滅
菌室へ吊るし、風の駆除をやって貰つた。お陰で身も
心も爽やかになった。僕は滅菌室の当番兵に衣服を盗

まれ、裸にされたのであった。

食糧が列車で来るはずと言っておきながら、遂に来ない。絶食である。さあ大変、どうなることかと心配した。二三日続いた。青帽は決断した。来年の馬鈴薯の種芋を放出してくれた（種芋貯蔵庫には山ほどあった）。種芋の放出は初めての決断と聞かされた。ソ連人もそれなりに分けて貰った。ソ連人マダムらは毎日、畑（凍土の畑）へ掘り残しの芋をバケツを持って探しに行くのであった。持ってきてベーチカで焼くとアンモニアの匂いがあるのである。それでも皆は喜んで食べておった。澱粉の塊のようになってはくはく食べられる。

我々は騙され騙され北緯五十五度のスタンチャ、バムのラーゲルに連れて来られた。人間の住む限界点だそうだ。我々は到着間もなく、木材運搬（煉瓦工場の薪用ポタである）を命ぜられた。初めての労働、初めての監督、可愛らしいおばちゃん女性監督ホーチャは、三十代後半くらいの色白で丸いポチャポチャとした小柄な女性だった。人なつっこい好感の持てる人

だった。小走りに足の速いこと。実にてきぱきとこまめに動き回っておった。妹も可愛い娘で未婚、名前はナターシャと言った。いくら虜囚の身でも若い可愛い娘には心和むものだ。

私は木材運搬はお手の物。入隊前は馬車運送、材木の探し方は自信あり。人の手を出さぬ物を片っ端から選んで運んだ。もう一人おった。川上君だった。彼と僕は木材運搬を終了して初めて作業優秀者として表彰された。

食糧がなくなり絶食状態の頃、無情にも「作業整列」のサイレンが鳴り、生ける屍どもが出勤である。工場へ到着したけれど、ふらふらのヤボンスキー・サルダート（日本兵隊さん）は哀れな姿であった。ホーチャは「皆さん部屋へ入りなさい、ストーブ囲んでお話でもしましょう」。我々はお話どころではない、色気どころではない。ホーチャは温かく我々に「何も食べていないのでしょう、今日は作業は休み、ゆっくりお話でもして休みましょう」。地獄に仏、観音菩薩か、嬉しかった。やっと心和んだ矢先、「ポチム、ニエラ

それを、満州から我々が荷物を積んで黒河まで持ってきたとき、軍の輜重車に、さながら桃太郎が鬼征伐の宝物を積んだように、ロープをかけて（手が冷たいので誰も手を出そうとしない、仕方なく僕がロープを掛けて締めた）運んでくるのであった。それが炊事用になったり、班内のペーチカの暖房に使われる。薪割りは金矢とハンマーを使った。タボール（金太郎式のような斧）もあった。根っこを細かく割るのである。二人びきのピラー（鋸）で切断したり、なかなか大変な仕事であった。年中空っ腹を抱えての作業だから、ましてや育ち盛りの若者には気の毒でたまらなかった。手や足など怪我させないように目配り気配りしながら、先頭に立って頑張った。皆よく辛抱して働いてくれた。軍人でもない少年兵、寝小便たれる者もおった。

薪を割っておるうちに誰か将校用の薪を割ってしまった。ラーゲルの係長将校にしたたか怒られた。「誰が割ったか、割った奴は出てこい」大変な怒りよう。日本将校たちは少年兵を出せと言った。僕は、少

年兵は出さぬ、僕が責任者だ、僕が出るのが筋だ、と僕が出た。その将校は僕を営倉に入れろと命じた。

営倉は守衛所の同じ屋根の下の一室である。狭い部屋へ入れられた。夜間には外は零下四十度。僕は毛布一枚投げ込まれ、どん底生活だ。まだまだこれしきで死んでたまるか、営倉だって家の中だ、冷凍になることはないだろう。今ごろ故郷では皆どうしておるだろうか、ただ一人の弟はビルマ方面へ行ったのかがどうなっただろう、結婚してただの十日で別れて来た新妻はどうしているだろうか。いろいろと走馬灯のように頭の中は駆け巡り、眠気も起きない。ろくに眠らぬうちに夜が明けた。そんなことが三日も続いた。食事は一かけらの黒パンだけ。塚本通訳は「若月 はハラシヨ・ラボーターだ、早く出してくれ」と懇請してくれたそうだ。お陰で営倉から釈放された。朝だった。少年兵たちは黒パンを差し入れてくれたり、迎えてくれた。皆、涙して喜んでくれた。彼等こそ満州に骨を埋める覚悟でやって来た立派な少年たちなのだ。夢破れ、兵隊とは何のかかわりもない者を、スターリン

は労働者として駆り集めてきたのだ。今ごろはそれぞれ地域発展の爲にも大いに活躍しておるだろう、幸せを祈っておる。この他、中国人、朝鮮人も数は少ないがおった。元憲兵隊の憲兵補や特務機関の勤務者たちである。彼等はいつ帰ったかわからない。

昭和二十一年春のころだった。どうも体がだるくてどうしようもない。自分の体を持て余した。だんだんおしっこも黄色っぽくなってきた。爪も黄色くなった。肉や魚など見たくもない、吐き気がする。これはただごとではない、鈴木ドクターに診察して貰った。どこも悪くないと言われ、仕方なく作業に行った。こちらは作業どころではない。友達は「遠慮することはない、休んでいなさい」と慰めてくれた。だるくてだるくて、困り果てた。明くる日思い切って診察を受けた。また、熱もないしと同じことを言う。頭にきて「ドクター、僕は黄疸です」。「なんだ、お前医者か」と怒鳴った。「目を診てください、爪も黄色です」。藪医者はやがて僕の上まぶたを捻り上げた。じーと見詰

めて、「うーん、これは黄疸だ、直ぐ入院だ」。僕はほっとした。

即入院。入院と言ってもただの医務室の隣の部屋なのだ。診察入院はよいけれど、薬なし、作業休み。砂糖を炊事から少し貰ってきつてなめること、食事は炊事が岩塩を調味料に入れる前に貰う、無塩食だけ。僕は疲労が原因の黄疸なので、疲労回復で治るという程度の病気であった。胆嚢が弱いほどでもなく、栄養失調と疲労が重なり合って黄疸になったのだと思った。無塩食ばかり三週間食べていると、各関節ががくがくして足の運びが伴わない。締まりがなくなつて骸骨が歩いているような感じ。それでも俺は甲種合格だ、絶対俺は元の体になるんだ、頑張らねばと心に誓うのだった。三週間で何とか退院に漕ぎつけた。内科の鈴木軍医さん、お世話になりました。藪医者なんて御免ね。僕は薬などなくても自力で治るのだ。

昭和二十二年秋、暮れのころだったと思う。バム駅にて家屋の廃材木材を無蓋貨車に積み込む作業であつ

た。各自、防寒外套、防寒靴、防寒手袋に身を固め、駅の引込線で木材を積んでおった。

大分荷はうずたかくなつた。もう一本で積み終わりが、どうも崩れそうだなあといいながら最後の一本を積んだら、案の定、木材はがらがらと崩れ落ちてきた。はっと気づき逃げたつもりなのに防寒靴が挟まれ転倒、木材と一緒に落ちて、下敷きになった。側溝へはまったところへ木材が重なり落ちてきた。人事不省、目も見えず、耳も聞こえない、仮死の状態になった。戦友たちはささず人工呼吸をやったりしてくれ、間もなく蘇生した。防寒外套を二着交互にして袖から棒を二本通し、応急担架を作ってくれ、僕を乗せて医務室へと運んでくれた。途中バラケリフ上級大尉ラーゲル所長の前を通りかかったら、山形県の戦友高橋弥蔵君がバケツに一杯茹でた馬鈴薯を持って泣いていた。彼は僕が担架に乗せられて行くので、多分死んだのだと早合点したのだった。彼は所長の奥さんのお気に入り、その日もベーチカ修理に向き、奥さんにバケツ一杯馬鈴薯を貰って、茹でて今夜は皆に腹

いっぱい食べさせるのだと大張りきりにしておったのだ。それが夢破れ、若月は死んだと、がっくりしたのだった。彼は医務室へ跳んできた。若月、死なないでよかったと、抱きついて共に泣いた。嬉しかった、よい戦友を持って幸せ、彼とは、帰るときは君の家へ泊めてもらって、餡こる餅をよばれて、それから山形へ帰るのだと約束しておった仲だった。

彼は毎朝配給のパンを節約して、沢山食べて早く元気になるんだと差し入れてくれた。自分の身を削つての戦友愛である。こうした立派な、親切な、親身にも勝る戦友を持って僕は幸せであった。それから彼は早く帰ったし、僕は憲兵経験が災いして最終帰還になったので消息は定かでない。老人クラブの旅行で山形上ノ山へ行つたとき、半日かけて電話帳を調査したけれどわからなかった。残念の極みであった。僕の受傷はありがたいことに骨は異常なし、右膝の側面三週間の打撲傷、松葉杖に一週間お世話になって、計三週間の入院で済んだ。

昭和二十三年六月ごろだった。第一次帰還組が三百人、ハラショ・ラボータ（作業優秀者）、病弱者などが帰還した。帰還と言ってもまだどこかで使われていたかも知れぬ。僕もリストに載ったそうだ。内心嬉しかった。突然、相沢通訳がやってきた。「若月君、君は憲兵だったと誰か密告したので、君の名前に赤線が引かれてしまった。残念だけれど我々もいるんだし、仕方ないなあ」と言われ、がっかりしたけれど、仲間がまだ二百人もいるしと、諦めもついた。

将校五十人、警察官、特務機関、憲兵隊、反動的下士官らが残された。二百人はチタへ転属になった。三百人帰ったので組織はばらばらになった。烏合の衆では民主運動の盛んなチタへは行けない、組織を選挙で決することになった。選挙と言っても立候補者がある訳でもなし、どうなることか、全員候補者だ。将校は五十人もいるのだから、何とかなるだろう。

当時は既にハバロフスクに本拠を置く日本抑留者向けの啓蒙宣伝紙「日本新聞」が発行され、週に二、三回くらい配布されておった。「友の会」方式で勉強会

が盛んになった。強制ではない、自発的に日本へ帰ってから為になるだろうと思う者が集まって勉強しておった。将校団も自然に階級章を捨てた。ごく自然に民主化が進んできたのであった。

選挙結果が出た。何も我関せずの僕が最高点で選出された。貧乏籤なんて言えば申し訳ないけれど、実は命幾つあっても務まるようなものではない。言葉は通じないし、能力もなし、参った。と言っても現実には現実、逃げることもできぬ。よし、どこまでできるか、命かけてやろうと決意した。はてさてチタは民主運動の盛んな所、楽団を作ろう、楽器はどうしよう、皆で話し合った。大だいこ、ギター、バイオリン、乾燥馬鈴薯の入れ物のベニヤ板を利用。糸、線は馬さんから尻尾の毛をカンバしてもらって、よくしたものでできた。バリトンやホルネット、トランペットはどうにもならぬ。クラリネットも駄目だ。仕方ない、楽団の名はガラクタ楽団では品行悪いし、一応「緑楽団」と命名した。

「赤旗の歌」「憎しみのるつば（誰かつくつたも

の」の闘争歌、などなど稽古して、チタへ堂々と乗り込もうという訳だ、小さな怒涛隊長を先頭に。これから先は誰も知らぬ、どんな試練が待ち受けておるとも。僕はどんなことが待ち受けていようと、この人たちを全員、日本海を渡すまでやらねばならぬ、例えこの身はいかになろうとも。捨て身の覚悟は既にできておった。

やがて我々の列車はチタ駅のホームへ滑り込んだのであった。

チタ駅から小高い丘のような道路を一・五キロくらい歩いた所がラーゲルである。南側の低い面がキノン湖、周囲六・七キロくらいの湖だ。丘の上に半土掘兵舎（防寒の為、土に半分埋められておる）。兵舎は四つ（三百人×四）一千二百人規模。他、本部棟一、炊事場と半分は食堂兼集会場一の建物で構成されておる。大きなラーゲルだ。僕らは建設寮へ入れられた。持っていたガラクタ楽器は恥かき道具、即倉庫入りとなった。ここでは本物のブラスバンド全てが揃って

おり恐れ入った次第。アクチーブ（積極分子）も多く、活発な運動が展開されておった。文化活動、学習会、演説会、壁新聞の類も多かった。

我々二百人は到着早々、チタの上流四十キロくらいの地点へトラックに乗せられ連れて行かれた。河は阿賀野川クラスの大きな河で、上流から流した木材が至る所に転がっている。河の中には流木が山になって折り重なって島のようにになっている。えらいことになった、どこから手をつければよいのか思案した。道具と言えは、突いたりひっぱったりする鳶口一丁だけだ。

六月入梅の季節に川仕事なのだ。藪や丘に漂着した木材は転がし運搬、手頃なものは二人で担ぐなどして本流へ流す。島のような山は下側から気長に一本ずつ引き出し流しながら山を崩してゆくのだ。島の下はごうごうたる本流で、木材の間へ転落すればお陀仏である。十八歳のソ連の青年がこうした事故に遭い死亡している。だんだんと山を崩してゆくと最後には山が一斉に動き出す。木材はくるくる回るから危険この上なく、速く機敏に逃げ丘へ上がらねば大変なことにな

る。仕事は二の次、安全第一にとやかましく命令した。この監督は馬鹿な奴で、我々を囚人扱い同然、革の鞭を喰らせながら「ダワイ、ダワイ、ヴィストラ、ヴィストラ（仕事をやれやれ、早く早く）」。牛馬扱いには頭にきた。

作業量がまた無茶で、午前中はこれだけ終わるまでは食べさせない。昼食が二時。午後はまたノルマが大き過ぎる。終わって夕食が八時、真っ暗になってしまふ。食は儼びた黒パン、スープだってまずいもので、寝るのは露天ごろ寝、梅雨どきなので雨も多かった。せめて天幕でもと要求すれば「捕虜のくせに文句言うな、戦勝国の兵隊でもごろ寝しているではないか」と。食事は悪い、家も屋根も天幕すらない。日中は川の中に胴まで漬かり、夜は着干しどころか雨でずぶ濡れ。兵隊は体が冷えて腹痛を起こし、次から次へと医務室送り。こんなことでは我慢ならぬ。係の将校に「スターリンがこんなことをやれと言ったのか、これが社会主義なのか、社会主義らしくもない」「儼びない黒パン、食料を持ってこい、天幕も持ってこい」と

要求した。時には抗議の手段として、十分おきに休憩を命じた。監督は怒った。「ジェーシヤチミヌートナラポト、ビヤーチミヌートアデーハイ、ヨッポイマーチ、プロホーイ、カンバート（十分作業、五分休憩、馬鹿野郎、悪い隊長だ）」、川を漕いで鳶口を振り上げてやってきて、僕はしたたか殴られた。殺されそうになった。

こうした状況を見ていた一人の青年通訳がおった。満鉄調査部の山形君は、僕の側へやってきた。「若月さん、僕を使って下さい。若月さんは殺されてしまふ。僕も覚悟決めました。牛蒡抜きになってもかまいません」。僕は心配だった。僕たちは通訳が少なからずおった集団で、頼めばやってくれる者もおったかも知れぬ。だけど通訳経験者は昔、それなりのスパイ活動に従事していた者とみなされ刑務所送りになるので、その犠牲者になってもらいたくなかったため誰も頼まないことにしておったのだ。「山形君やってくれるか、ありがとう。皆の為だ、何千の援軍を得たようだ」。それから名通訳は真剣になって、「日本人とはど

んな者か、敗残兵ではない、いつでも命を捨てるくらい
のプライドを持った者ばかりだ、いちいち口うるさ
く言わぬとも、朝、隊長に作業計画を伝達すればそれ
でよい、後は隊長を信じて柳の木陰にでも昼休みして
おるがよい、兵隊は鼻歌を歌いながら作業はかえって
捗るのだ」と通訳して貰った。それから馬鹿も利口
になってくれ、日本人を理解し、要求も通るように
なってきた。言葉の通じないほどお互い意思疎通がで
きなく、あるときは腹が立ったり憎んだり、とんでも
ない方向へと進展する。殺されそうになったけれど、
よい経験と受け止めたい。

一カ月くらいの作業で、二百人行ったのに五十人し
か残らなかった。皆ポリノイ（病気）で医務室送りと
なった。監督は元囚人の監督で、我々を囚人と同じも
のだと思っておったそうだ。馬鹿馬鹿しい。前段の流
木流し作業は、馬鹿監督やレチナンド（将校）に「ワ
イナブレーション（捕虜）のくせに生意気だ」とピスト
ルをがちやつかせながら、殺してやると追われたり、
俺を殺したら貴様だってただでは済まぬだろうと、い

ろいろあったけれど、何とかラーゲルに帰ることがで
きた。皆、腹具合を悪くして医務室へ行った。腹が冷
えた為のものであった。薬は焚き火の炭を砕き粉にし
て飲まされた。大した薬であった、口を真っ黒にし
て。忘れ得ぬ薬の話。

経験者だということでもまた別の河へ同じ作業に行く
ことになった。今度はベテランの相沢通訳に同行して
もらった。彼は僕より十くらい先輩である。どんな難
しいことに遭遇しても、ソ連人をうまく操縦してその
気にならせてくれる、巧みな通訳ぶりである。今度は
大船に乗ったようなもの、作業も食事も天幕もばっち
り、作業も慣れておるので楽だった。監視兵も友達扱
い、暇を見つけては魚釣り、茸取り。魚はハヤのよう
な小さなもので、柳の細長い棒（釣竿）に馬さんから
尻尾の毛を恵んでもらって釣り糸、針は筏に使ってお
るワイヤーを切って、適当に曲げて作る。餌はミミ
ズ、これで出来上がり。淵の深い所へ行くと魚がたく
さん遊んでいる。針は四本くらいつける。ミミズを
セットして淵へ放り込む。魚はわっと飛びつく、すか

さず丘へ引き上げる。四匹一度に釣れる。飯盒にたくさんとってきて焼いたり、煮たり、茸汁を作ったり。また、はまなすの赤い実が沢山ある。これではまなすジャムを作った。結構、腹が減っているの何を食べても栄養になるようだ。また、こんなこともあった。茸狩りに行ったらミミズクがおったので追いかけて捕まえた。夜行性で、昼、目がよく見えないようだ。

ちょうど川向かいにコルホーズがあった。泥棒を警戒しながら馬に乗った監視者が巡回している。柵も作ってある。番人もおる。迂闊には入れないコルホーズの畑である。監視兵に相談したら一緒に行ってくれとの返事、下手すると命取りになるかも知れぬ冒険である。それに周到な準備が必要だ。日中なに食わぬ格好で魚釣りを装ってコルホーズの状況を探った。どこが一番監視の目から死角になっているか、番犬の居場所はどこか、舟着き場はどこ……暗闇の泥棒。馬鈴薯の入れ物は藁布団の皮（袋がわり）を持って、舟は慣れたカンボーイにやってもらう。銃は僕が預かり、十人くらいの泥棒集団隠密行動。念には念を入れて、

泥棒の頬かむりは白いので駄目、目立たぬ風呂敷を使うこと。各自荷物ができた者から隠密に舟の場所へくこと。咳やくしゃみは禁物。カンボーイは、あちらから発砲されればこちらも撃ち返すから心配するな、といった具合で、夜襲は見事成功したのであった。とって来た馬鈴薯は飯盒で煮て館のようにすり潰し塩加減をし、腹いっぱい食べた。カンボーイも同じく、あまりに腹いっぱい肩で息する具合と言って笑った。藁布団は芋布団に早変わり、背中がごろごろして寝具合の悪いこと。

今度は下流へ移動することになった。芋布団の目方が多すぎて筏が沈んでしまうので、兵隊は徒歩で川べりを下った。下流へくると麦畑があり、穂はもう実っている。馬鈴薯もよいけれど、頬かむりして小袋を持って、どっかと麦畠の中にあぐらをかく。手元に麦を寄せ集め脱穀だ。たちまち袋はいっぱいになった。これは初めてのことで食べてみないことには、そんなに欲張るほどの物ではない。幕舎の前で風で選別をして中へ入った。運よくちょうど間に合った。監視

者が馬に乗って銃を肩にやってくる。危機一髪であった。じろじろ見ていたけれど何にも言わずに立ち去り、ほっとした。芋布団でも見つけようものならたまたまではすまされぬ。麦は裸麦のような物で、早速飯盒で煮た。いくら煮ても柔らかくならぬ。焚き物もろくなものしかないので、諦めて食べてみたら、ごくごくしたような感じで、噛んでは皮など捨てながら時間かけて食べた。麦はこれ一遍でたくさんであった。

監視者は馬鈴薯泥棒がわかっておったと思う。ただ日本の我々を気の毒に思っ、見て見ぬ振りをして立ち去ったと思った。ロシア人はこせこせしない。島国根性の日本兵だったら、容赦勘弁しないだろうとも思った。

このたびの流木流し作業で驚いたことは、総監督は現場の作業進行状況を確認する為、飛行機で飛んで来るのであった。この木材はチタの揚げ木場へと流れていって引き上げられ、それぞれ用途に選別されて、建設用材、燃料などなど区分され消費されるようだ。飛行機で現場を見に来るなど凄いと思った。二十万立方

メートルの木材は牽引車、馬などで河まで運ぶとのことであった。

昭和二十三年冬、チタ駅へ百五十人くらいで鉄道関係のいろいろの作業に行っていたときのことである。僕は十五人くらいの組長として勤務していた。線路の水を取り除く作業であった。

ある日、駅近くに住む老婆が「ヤボンスキー・サルダート（日本の兵隊さん）、お願いします。暇をみて私の家へ来てください。薪を切ったり割ってもらいたいのです。カルトーシカ（馬鈴薯）、麻袋一杯あげますから」と言ってきた。これはいい話だ。久し振りに皆にお腹いっぱい食べさせられるか、よし、と休憩時間、間に三人を行かせた。ところが、休憩時間は十分間、なかなか帰って来ないので困った。二十分後にやっと帰って来た。彼らは、おばあさんは一人暮らし、薪を切ったり割ってもらいたいとのことであつたので、作業終了後また来るからと言ったという。すると、「よろしく頼む、まずスープとパンを食べて行きなさい」と勧められたので、御馳走になつて時間が十分遅れま

した、すみませんでした、ということであった。

驚いたことに、作業から帰ったら、民主グループ中央委員会から本部へ出頭を命ぜられた。何用かと出頭したら前述の話、君は民主運動のリーダーでありながら、作業突撃カンパニアの展開中、ソ連の五カ年計画に協力しなかった。兵隊は三十分も作業できずにサボったことになると言われた。いやな予感がした。密告者は後日、僕の組の将校、少尉と見習士官と知れた。

人民裁判になった。建設寮三百人全員集合、僕は被告席に座らせられた。裁判官は起訴状を読み上げた。

「若月は今日、チタ駅作業場で組員三人をとある老婆の元へ派遣して、三十分も遅刻、ソ連の建設作業に遅滞を来した。本人は口では民主主義を唱えながら、実行が伴わず、天皇制護持論者である。かかる反動は絶対許してはならぬ。我々の中に巣くう最も悪質な分子である。寮生諸君に問う。彼をいかに処罰すべきか、遠慮なく意見、発言を求める。なお、これに関連した三人も同じである」。誰一人発言する者もなく、暫く

の沈黙が続いた、しーんと水を打ったように。僕は発言を求めた。「裁判長の発言によれば、僕以外の三人にも刑罰をとのこと、反対である。僕は確かに三人を派遣した。遅刻したことも事実であり、認めます。しかし三人は僕の命により行ったもので、全責任は僕にある。僕一人で十分だ。こうしたことを理由に僕は天皇制護持論者と決めつけることは納得いきません。僕は皆に芋一つでも余計に食べさせてやりたかった。ただそれだけであります。終わります」。裁判長は、「若月は口うまく言っているけれど、寮生諸君の発言もなので、民主グループ規律委員会に処置をお任せいたしたい」。異議なしの声。「それではそのようにいたします。今晚はご苦勞様でした」で、お開きになった。「若月は明朝、本部へ出頭すべし」の声を残して。

翌朝、僕は本部へ行った。結論は、ラーゲル一番の難儀な重労働の現場、第三煉瓦工場へ配転。そして、今までの公職はすべて解職。身軽でとても楽になり、気分爽快に感じた。

この工場はチタ市の経営である。相変わらずのおん

ぼろ工場。僕は最も難儀な粘土掘削の現場へ行かされた。トンネル式に掘っている現場で、ストーブを燃やして粘土を溶かしながら掘削するのであった。粘土を鍋トロッコに積んで、煉瓦工場の攪拌機の上へ電気で巻き上げて粘土をあけると攪拌機のところへ落ちてゆく。粘土に適度の水を加えて攪拌し、柱状の羊羹のようになって下へ押し出されてくる。下はテールになっており、出てきた粘土柱を針金の二本ついた切断機で切ると二枚の煉瓦が出来上がり、それをトロッコに積んで乾燥室へ運び棚に並べて終わり。一日のノルマは八千枚といった工程である。当時、スタハノフ社会主義生産カンパニア（生産競争）が展開されていた。

罪人の僕が行ったら偶然にも僕の後輩、田京君がいた。元同じ地区の友達で懐かしかった、田京君も喜んで迎えてくれた。「若月さん、誰もあなたを反動などとは思っておりません。あなたが来てくれて皆喜んでおりますよ」と言われ、嬉しかった。田京君は「僕に任せて下さい、食事伝票切りますから」と言ってくれ

た。ノルマによってA・B・C食に区分されている、僕の伝票はいつも最高の量のものであった、地獄に仏か、僕は幸せて、感謝した。

さて、僕はつぶさに現場を見聞して、どこに作業の溢路があるか、点検した。生煉瓦の運搬用線路の整備だと直感した。脱線ばかりして骨折り損のくたびれ儲けでは駄目だ。職場会議に提案して、日曜日を返上しても線路を整備しようと呼びかけた。全員異議なし。早速実行して脱線の苦勞から解放され、能率は向上した。

他にもいろいろ溢路を改善した結果、面白いくらい成績が上昇した。ソ連人の過去のノルマのレコードは一日に八千枚。我々は一万三千枚を達成して、各職場を引き離して断トツ。優勝旗は我々の頭上に掲げられたのである。工場長はじめ支配人たちは喜んで祝福してくれた。「君たち日本人の英知と創造、たゆまぬ努力は立派な模範である。我々ソ連人は君たちの模範に学び、追いつけ追い越そうの運動を展開するであらう。シベリアの僻地に素晴らしい模範を示してくれ

た。ありがとう。日本人労働者の栄光を忘れないだろう。我々も感激した。素晴らしい感銘であった。日ソ友好の足しになれば幸いである。

毎日、粘土との戦いにくたびれてくたくたになって帰ってくる。食事が終われば本部へ行って残業（罪の償い）の指示を受け、夜九時まで糞尿の処理。凍った糞柱をバールで突き壊したり、小便氷を突き壊して片付けたり、炊事場裏の清掃。零下四十度。手は感覚がなくなる。月は赤く薄ぼんやりと下界を照らしている。キノン湖の氷の割れる音が、みしーんみしーんと響いてくる。今夜も寒い。天を仰ぎ見る。今ごろは故郷では、あの煤け障子のある風呂で僕や弟のことを思い、二王子山から出たこの月を眺めているところだ。

地球には何十億もの人間が生きている。僕はよりによってただ一人、こんな苦勞をしている。嘆いても仕方ない。よーし、これも我が人生の試金石だ。どこまで耐えられよう。まだ死なないぞ。死ぬよりはましだ。苦しみを楽しみに反転できぬものかと考えた。昔、山中鹿之助は三月月に「我に七難八苦を与え給

え」と祈ったというではないか。勇気がだんだんといてくるのであった。

夜九時、寮生たちは音楽会が終了して帰ってくる。

僕は小便氷割りに余念がない。暗い夜中を幸いに二、三人の寮生たちが僕のそばへ近づいてくる。「若月さん、ご苦勞さん。この仇は必ずとってやりますからね。しばらくの辛抱です、風邪を引かぬようにね」、低い声での励ましである。僕と接触すること自体、反動分子として日をつけられる動機になるというのに。馬鹿馬鹿しい、こんな民主運動があるか、貴様らこそ偽民主主義者だ。帰国を早める為の装いでしかないではないか。僕は独りつぶやいた。

一週間後、ラーゲル全寮生の参加する人民裁判が始まった。大体、入ソ当時は軍の編成組織の延長のようなもので、幹部らは特権を乱用して衣服や食べ物、ビンハネや横流しで、下級兵士たちが栄養失調になり、弱り目にたたり目といったところへ発疹チブスが発生し、モロドイ収容所では一週間に五百人中二百七十人もの命を奪われた。その幹部の中には、僕を密告して

青年グループにのし上がった二人も入っていた。僕が裁判にかけられてから僕の友人たちが復讐心を起こし、彼等をどうしても許せなかった。

裁判では、彼等こそ反動であり、弱い初年兵らを栄養失調にしたのだと絶叫した。ソ連当局から支給された物をそのまま配給しておればこんな悲惨な、二百七十人を犠牲にしなくても済んだのだ、兵士たちは次々立って訴えた。その当時のモロドイの幹部将校らはその事実を認めた。兵たちは、こんな反動こそ日本海を渡らせてはならぬ、ソ連当局に話して処断すべきだ、激怒、悲憤の涙、延々と続いた。「若月は真面目によくやっているから罰は解除にする」と決定された。

僕の友達は喜んだ。いろいろのこともあったけれど、特に忘れられぬ裁判である。被告らは指を切って血書をしたためた。「私どもは帰国後、亡き戦友たちの墓に参り、罪を懺悔し、謝って歩くことを誓います」、被告名連名で食堂に掲示された。

ミヤソコンビナート（屠殺場とソーセージ工場）がチタ市にあって、ザバイカル地方最大の屠殺場であっ

た。シベリア、満州あたりからどんどん牛、綿羊が入ってくる。工場は駅のホームくらいあって、鉄道引込線利用、一日のノルマは牛で八時間六百頭、二交代制で千二百頭。綿羊はその倍であった。貨車でどんどん入ってくるけど、間に合わぬくらいだった。期間は八月から十二月まで、二交代制である。ソーセージ工場もある。屠殺、排血、首切り、剥皮、断ち割り（逆さに吊って鎌で断ち割る）、内臓処理、脂の採取、洗浄、検査（品質等級判定、病気牛）、レール滑車に吊るしたまま冷蔵庫（ビルのような大きな部屋になっている）、その前に重量「検査」があり、すべて記録される。以上がシステムの概要である。

毛皮は引込線の所までマントを着て引きずって行き、岩塩を砕いた粉を毛皮の内側一面に塗って梱包、結束して貨車へ積み込み、皮革工場へと運ばれる。血液は蒸気で熱し固まった物を樽詰めにして、何にするかは不明。腸は水道の蛇口を突っ込んで洗浄（石灰水らしい）した物をソーセージ工場へ。内臓あたりから取った脂は蒸気で熱し、上の澄んだものをダンボール

箱に詰めて、これは食料や石鹼用になるらしい。僕は百人くらい連れて通った。捕虜たちの羨望的であった。通訳は前述の相沢さんで、大船に乗った気分。ノルマは超達成。革命記念突撃生産カンパニアには、僕は最高の榮譽である「労働の英雄」として表彰された。これはみな相沢さんの力であった。僕はそんな立派な者ではない。ここの施設はみな自家発電でやっている。発電所つきだ。

面白いのは肉工場であり、囚人を多く使っているのでラーゲル並みに鉄条網を張り巡らし、マンドリン兵が監視している。守衛所も二カ所になっており、帰るときは身体検査をされる。盗品の摘発だ。にもかかわらず、ソーセージ工場から物を衣服いっぱい詰め込んで柵の下から渡すと、外では連絡員が来ており、それを受け取って逃げて行く。監視兵もグルらしい。屠殺場では一番高級な良いロースとか胸の部分をメスではぎ取り袋に入れて、屠殺待機中の牛の群れの下を這いながら、柵外の友にバトンタッチする。これも前述のとおり、盗品を市場へ行って売り飛ばし、月給より沢

山収入があるとうそぶいている。彼等は財布などない。無造作に、ズボンのポケットが財布なのだ。マホルカ（煙草の代用品）などもズボンのポケットにばらに入れておるのが普通なのだ。戦争で武器弾薬以外、市民のすべての物は作れなかったのだ。ラーゲルで朝夕の点呼の記録でも、板をカンナで削って、鉛筆も我々から貰って記録していた。紙一枚もなかったのだ。カンナだってそうだ。我々の中に建設隊の誰かが大工で、持っていたものを貰ったのである。貧乏もここまで徹底するとは驚いた次第。

チタ第三分所に移った。同じ市内なれど少し離れた所で、松林もあり環境のよい所だった。建物も寮が二つ、炊事棟、集会所、守衛所、人員は六百人くらい。

作業はチタの鉄道省の建物の建設、第七工場（鋳物）の作業、国道の建設工事、たまには出張して白樺林の伐採作業などであった。僕は炊事場の竈の火焚き、薪割り、たまにあんこ練り（饅頭にあんづくり）、冷凍肉（綿羊）の解体、いろいろやった。食器洗いは

二人で六百人くらいの物を洗った。水は井戸があつて助かった。一週間に一度は鰻頭とかケーキ等作つてあげた。砂糖や油、脂など節約して溜めておき、つくるのである。結構お菓子の職人も魚屋もおるので、材料さえあれば何でもできるのであった。革命記念日のデコレーションケーキなど、文字を表面に書き、素晴らしいもので喜ばれた。鰻頭のあんこ練りは羨ましがられた。自分でやってみれば食べられる物ではない。お正月前だったか、レチナンド（将校）が「君達の欲しい魚の樽を一つやるから、どれでも食べてよい」と言われた。何と言つても鮭だ、鮭の樽はどれかな、横文字が書かれているけどわからぬ。レチナンドも黙つて見ている。鮭、鮭、心の中に念じつつ、いつまで思案していても仕方がない。決断、これだと樽に手を掛けた。レチナンドは何も言わない。ごろごろと炊事場で転ばしてきた（昔のセメント樽の倍くらいの大きな樽）。胸中、ときどきしながら、思い切つて開けた。凄く大きな銀色の鮭、念願になった、万歳。他にもしん、白魚などもあったのは幸運だった。レチナンドは

「よかった、よかった、済まないけれど、将校の家族に少し分けてくれないか」「どうぞどうぞ」と言つて分けてやった。入ソ當時とは変わったものだ。日本人を理解してくれるので嬉しかった。

毎月一回、市内にあるオペラ劇場へ招待された。

我々はオペラなど、言葉もわからないし、寝ていたいだけけれど、折角の心づかいを無にするのも悪いし、正直渋々行くのであった。白鳥の舞い、いろいろと珍しい劇を観劇させて貰った。通訳が盛んに通訳してくれるけど、何と言つても捕虜の身では、心から和むものではなかった。ソ連当局の心づかいは、宣伝もあり、少しでもよい感触で我々を慰める意味もあったのだらう。同じシベリアの虜囚の身でありながら、我々は恵まれた環境であつたと思う。班内も各自、作業現場から持ってきた廃材やペンキなどで、スローガンや絵などで裝飾コンクールを展開し、競い合った。作業の往復には闘争歌を歌つたり、同志諸君などと演説を繰り返し、文化活動も音楽コンクール、演劇コンクール、スポーツも盛んになっていた。

数集まればよくしたもので、脚本を書く者、演技の得意な者、音楽の堪能な者、編集では新聞を作る者、スポーツの得意な選手、何でもできたのである。

二十四年十月、我々は帰還だと言われ列車に乗せられたけれど、またコムソモリスクへ連れて行かれた。市内の労働者アパートの建設に従事した。アムールの港町で、港から町中へ軽便鉄道で建設資材を運んでいた。砂利、礫、セメント、みな港から。驚いたのは、セメントがばら積みで、スコップ、袋などなく、それでも硬化しないのだ。生石灰もばらで倉庫に積まれている。発火しない。湿度がないのか、驚いた。ここは平地で、暗渠を造りながら町を造るのだ。大きなアメリカ製のトレンチャーが掘削をやっておった。ソ連人は、日本にはないだろうと自慢しておった。自慢の好きな人たちだ。監督クラスになると、普通、作業中でも勲章の略綬を胸につけているのだ。

ここは中間集結地ナホトカよりの連絡待ちといったところ、もう仕事など手につかぬ。今か今かと一日千

秋の思いであった。一日の長いこと、もう十一月だ、ぼやぼやしていると年越しになるぞ、焦ってきた。作業中、連絡が入った、ダモイ、ダモイだ。待ちに待ったダモイ、騙され騙されここまで来たが、我々は船に乗るまで信用しないことにしている。

いよいよハバロフスク経由で待望のナホトカへ帰還列車は到着した。寒い、人、人の多いこと。宿舎へ案内されたけれど、寝る所もないじゃないか。気温もすっかり寒くなって、朝の海上は薄氷が張っている。夕食も終わり、寝るとなるとどうすれば寝れるか。足、頭、足、頭と交互になって、仰向けでなく横にならねば収まらない。廊下でもどこでも少しでも空いた所は遠慮しておれぬ。夜中になって用足しにでも起きようものなら、そばの寝ぼすけが伸びるので、入る場所がなくなってしまう。こんなことが二、三日続いた。

いよいよ我々を迎えに来た栄豊丸が岸壁に着いた。「これから呼ぶ者は門から出よ」。聞き漏らすもんかと、耳をそばだてた。「ワカツキ、タローベエ」。

やった。鶏が一斉に飛び出すような気持ち、足が地につかぬ感じ、虎口を脱したような思い。足取りも軽くタラップを駆け上った。船上には迎えに来てくれた人たちが「ご苦勞様でした」の連発。やっと本物のダモイ（帰国）だ。

船上の人、人、「ダスヴィダーニヤ（サヨナラ）」ハンカチを振る人、涙を拭く人、万感胸に迫りて言葉なし。期せずして「起てー飢えたる者ーよ……（インターナショナルの歌）」はナホトカの山々に衍して、憎しみも忘れ、別れのシーンが繰り広げられた。

十一月の末日、薄氷を排しながら栄豊丸は一路、祖国目指して出港した。揺れもなく平穩な舞鶴航路だ。現役兵として満州へ行くときは二月末、玄界灘で百合丸（七千トン）は木の葉のように翻弄され、天地がひっくり返るようだった。皆、船酔いで絶食、この世の地獄だった。航路が変わればこんなものかと驚いた。

入隊するときは玄界灘で船酔いで殺されそうだったけれど、今度は新しい畳敷き、お座敷気分、全然揺れ

ぬ。真新しい毛布、煙草は光、パンは黒パンでなくコッペパン。うまい、何を食べてもうまい。平穩な航海である。

一夜明ければ日本海も冷たい海から脱出し、暖かな海に変わってきた。暖流のせいかな、霧がかかっている。祖国はやはり温かだ。我々を迎えてくれているのだ。マッカーサーの支配下で祖国はどうなっているだろう、不安であった。

日本列島が微かに望見される。祖国だ。皆は甲板いっぱい山盛りになって歓声を上げたり、涙を流している、もう二度とシベリアへ行くことはない。舞鶴の町はひっそりと、煙も出ぬ煙突が寂しさを物語っていた。霧だけは温かくそれを包むようにたなびいていた。

二十四年十二月二日、九年ぶりにやっと祖国の土を踏むことができた。満州やシベリアの凍土に多くの戦友を残しての我々の足は重かった。「岸壁の母」の栈橋、五十万も渡った栈橋、渡ることのできぬ戦友を思うとき、まさに断腸の思いである。

ここで、最愛のただ一人の弟寅之助が、ビルマで二十年二月十七日、斬り込み分隊長として戦闘中、迫撃砲にやられ、足を三回も切断、七転八倒のところ、敵の爆撃を受け爆死したとの父からの便りが僕を待ち受けていた。こんなこともあるうかとかねがね覚悟はしていたものの、現実となってしまうた。また、義兄（妻の兄）もシベリアで無念の最期を遂げたことを知った。生き残った僕らの務め、反戦平和への誓いを固めたのであった。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正九年二月二十五日

経歴

昭和七年三月 川東車野尋常小学校六年卒業
 昭和九年三月 米倉尋常小学校高等科卒業
 昭和十一年三月 川東村立国民学校本科四年卒業
 昭和十五年五月 徴兵検査 甲種合格
 昭和十六年二月 現役兵として北滿綏芬河第二国境

守備隊二二九部隊五中队入隊	八月	昭和十七年二月
陸軍二等兵（二月八日結婚・出征 二月十八日出発）	八月	昭和十八年二月
陸軍一等兵	九月	昭和十九年四月
陸軍上等兵	十月	昭和二十年三月
陸軍兵長 下士官勤務	五月	
関東軍憲兵隊綏陽憲兵分隊綏芬河憲兵分遣隊派遣さる	八月	
同 鶏寧憲兵隊本部へ転属	十月	
陸軍伍長	五月	
同 東安憲兵隊本部へ転属	八月	
北安歩兵第二六九連隊へ転属、教育基幹要員として	十月	
北孫呉松風一二三師団司令部へ派遣、文書係 命令係	五月	
一日、陸軍軍曹	八月	
九日早朝、ソ連軍機爆撃、戦闘開始	九月	
十五日、ボツダム宣言受諾 敗戦	十月	

九月 シベリア連行、抑留生活、バ

ム、チタ、コムソモリスクで労働
昭和二十四年十二月 栄豊丸で舞鶴へ帰還 故郷へ帰
る

(新潟県 中村 甲)

シベリア抑留記

富山県 山田 秀三

昭和二十年八月十五日、天皇の命により終戦、本隊に結集した。統々飛行場へ周辺部隊が集結してきた。

内蒙古の部隊は戦闘しながら退却して悲惨な状態だったと、後退した状況を聞かされた。

飛行場の格納庫に八七戦闘機数十機、兵器弾薬が山のように集積されてソ連軍に没収・武装解除され、捕虜の身となった。飛行場は高圧線が張り巡らされ、鉄道引込線の施設が装備されていた。数万の部隊の集結である。戦争が終わって内地への帰還が取り沙汰され

ているが、一カ月たっても帰還の船がないとのことで不安な日々を過ごした。その間、我々はソ連軍の捕虜の身、心配でいろいろなデマが飛ぶようになった。

部隊は混成部隊に編成されて、いろいろな兵科の千人単位の部隊となり、帰国の命令を待った。部隊長は航空少佐、中隊長、小隊長も航空操縦士の将校で部隊編成されて、十八人の分隊長の指揮を命ぜられた。

日が経つにつれ、集結されていた部隊の移動が始まった。引込線に有蓋貨物車が続々と入るようになり、どこへ行くのか部隊が移動して行くようになり、我らの部隊も一貨物車二段の棚に五十人ずつ詰め込まれて、千人一列車で発車した。九月の下旬、もう満州は朝夕寒い季節である。ソ連軍の指揮下に入ってから食糧も不規則な配給となり、ソ連兵の程度の悪いのにはほとほとこずった。列車も所々で停車し、鈍行列車の輸送である。

十月に入って阜新駅で下車させられた。どこかの港から乗船するのか言わないが、船がなくてここではらく使役をと、部隊長からソ連軍の命令だとの伝達であ